

和田義盛と鴨居

わだよしもり

今年和田合戦から八百年の節目にあたります。西徳寺や鴨居に流れる和田川に語りつがれる伝説の主人公和田義盛は、鎌倉幕府創設時に大いに活躍しました。



鴨居地域には、平安時代の末期から鎌倉時代の初期にかけて活躍した武将・和田義盛にまつわる伝説が残されています。それは、東浦賀から鴨居へ抜ける梅山の坂を越え、正面に鴨居港が見えてくるあたりの右手にある西徳寺に伝えられるものです。この寺の一角には和田地蔵と呼ばれる石の地蔵が祀られています。和田義盛は路傍で見かけた地蔵の姿に引かれ、「このたびの合戦に勝てるならば川上

へ、そうでなければ川下へ流れてください」とお祈りしました。そしてこの地蔵を川に沈めると、不思議なことに地蔵は半身を浮かべて川上へ流れていききました。これを見ていた義盛らの主従は感激し、川のほとりにお堂を建てて地蔵を祀りました。のちにこの地蔵は和田地蔵と呼ばれ、いつの頃からか西徳寺の境内に祀られています。また、この川は、こうした言い伝えとともに、いつしか和田川と呼ばれるようになりました。さらに、寺の裏山にある和田塚、あるいは義盛塚と呼ばれる剃刀塚は、和田氏の兵が月代を剃るのに使った剃刀を埋めた塚であると伝えられています。また、鎌倉の由比ガ浜にある

和田塚は、建保元年(一一二二)に和田氏の一族が北条氏との戦いに敗れた場所であり、史跡として保存されています。ここで、鎌倉幕府の武将・和田義盛の人となりをご紹介します。

和田義盛は、衣笠城の城主として三浦一族の繁栄を築いた三浦大介義明の孫(長男・義宗の長子)として生まれました。しかし、三浦氏を離れた父は杉本氏を名乗り、義盛も杉本氏を継ぐことなく和田氏を名乗りました。なお、三浦氏の宗家(本家)は、義明の次男・義澄が後を継いでいます。

治承四年(一一八〇)源頼朝は伊豆で兵を挙げます。しかし、頼朝勢は石橋山合戦で平家軍に敗れ、真鶴港から船で安房へ逃れて行きました。安房から上総、下総、武蔵へと進軍していった頼朝の軍勢の中で、三浦一族の和田義盛、三浦義澄らは中心的な役割を果たしました。

途中、平氏の一族を多数味方につけて鎌倉に帰った頼朝軍は、鎌倉幕府を開きます。この時、和田義盛は戦での功績により、鎌倉幕府初代の侍所別当という重要な地位を与えられました。侍所別当というのは、武将たちの指揮監督や裁判を司る機関における最高責任者を意味します。

鎌倉幕府において頼朝の側近として権勢を誇った和田氏でしたが、北条氏の巧みな戦略により、同族である三浦氏の支援もなま減亡してしまいました。今からちょうど八百年前のことです。

月代：昔の男性の髪型。額から頭上にかけて月型に髪をそり上げたこと。



★参考資料

- ・「横須賀むかし話」堀越英男・編著
- ・「三浦半島の史跡と伝説」松浦豊
- ・「朝日 日本歴史人物事典」



歴史 語りい座・浦賀 三十二

郷土史家 山本 詔一



●奉行二人制となる●

文政元年（一八一八）五月に来航したイギリス船ブラザース号は、おとなしく出帆して、大きな事件へは発展せず解決した。

しかし、この時の浦賀奉行・内藤外記は江戸におり、浦賀へ駆けつけたのは五日もたってからであった。

本来なら現場の責任者として、陣頭指揮をとることが当たり前であるが、その責務を果たすことができなかった。これは奉行の内藤が怠けていた訳ではない。浦賀奉行所が開設された享保六年（一七二一）から、奉行は特別なことがない限り、浦賀へは行かず、江戸の自分の屋敷を浦賀奉行所の「江戸役所」として、幕府とコンタクトをとることが主な仕事であり、浦賀のことは与力・同心に任せているのが通常の状態であった。

もつとも『御役人代々記』には「毎年三月に、（將軍に）暇乞いをして、百日間は御役所に詰めて、江戸へ戻る」となっている。本当にこの文章通り行われていれば、内藤が浦賀に詰めている時ブラザース号が来航したことになるのだが・・・

ちなみに、この時、ブラザース号が出帆したのが五月二十一日で、内藤奉行は二十三日には江戸へ帰っている。

こうした状況を重くみた幕府は、異国船渡来という極めて重大な事件ばかりでなく、常日頃から浦賀奉行所の手薄な状態を改善し、あらゆる事態に万全を期する体制をつくるため奉行の二人制を定めた。

文政二年（一八一九）正月（江戸時代は一月という言葉は使用されていない）、筑紫佐渡守が中興御小姓から浦賀奉行に転役となり、ここに浦賀奉行は二人制となった。この折、幕府から、浦賀・江戸の両役所は、異国船来航ばかりでなく、日頃より連絡を密にとり、役務に万全を期すよう命ぜられた。

また、交代の時期は毎年三月とし、これまで役料は五百俵であったが、これより千俵と増額された。これは浦賀奉行所の重要性が認められたことの一つの証しであった。

こうして二人制が始まったことが、浦賀奉行所の「文政の改革」の第一段階であった。

文政三年（一八二〇）十二月、十年間にわたって江戸湾警備の任務に

ついていた会津藩に「御備場御用御免」が言い渡された。会津藩が担ってきた警備の役割は浦賀奉行所に課せられることになった。浦賀奉行所は開設以来百年間、与力・同心の増員はなく、与力が十騎、同心五十人の体制であったが、この人数では会津藩が警備していた観音崎や平根山（浦賀港入口にある灯明堂の裏山）などの台場へは、人員を回すことができないことから、与力が四騎、同心が二十四人増員された。

さらに、百年ぶりのベースアップもあり、与力の禄が四斗入り七十俵であったのが、百俵になり、同心は三斗五斗入り二十俵であったものに、二人扶持が加わった。

今まで浦賀の役人の俸禄が上がらなかった理由は、「御組揚げ荷物」といって、廻船が役人用に様々な荷物を置いていってしまい、これをただでもらってしまえば賄賂となってしまうので、役人が勝手に値段をつけ、次に浦賀へ寄った時に支払うということをしてきた。浦賀の役人はそうでなくても、頂戴物が多いので、これらを見逃してもらおう代わりにベースアップはなかった。

笑話一題

千年以上の歴史を持つ四国霊場八十八カ所。『この世は迷いの世界で、自分のまわりを壁が囲っている。』遍路が被る菅笠に記された文字の一部です。では、迷える人々は、何を求めて四国遍路に出たのでしょうか。

そも、四国遍路とは、徳島の一番札所・霊山寺から高知、愛媛を経て、香川の八十八番・大窪寺まで、およそ1200kmの巡礼道。一日平均24km歩いて50日、自動車でも回っても8日はかかります。通常は一番から番号順に右回りに歩く「順打ち」ですが、左回りの「逆打ち」は、三倍の御利益を得られるという俗説もあります。

そして回り終わった後は、再度一番札所へ行って「お札参り」をする。さらに、弘法大師が入定した高野山奥の院へも参詣するのが決まりとされています。

そんな四国4県をつなぐ遍路の道には、密教の胎藏界曼荼羅で説かれている仏教修得の四つの道場、発心・修行・菩提・涅槃の「四転説」が反映されているといえます。

私は、二回程、自動車でも回っております。おそらく実際に通って歩いてみれば、この四つの言葉が、各県の気候風土や道程に不思議と対応することが納得できるはずでしょう。

れなママ

浦賀コミュニティセンター 講座開催のお知らせ

「セピア色の浦賀」 吉井編 3月5日（火）

地元在住の方に地名の由来・屋号などのお話を聞いた後、付近の神社仏閣を訪れます。

広報よこすか、浦賀 TODAY 等で募集を行います。ご興味のある方は、是非お申込みください。